



SUSAP2019SPRING パシフィック大学プログラム

2019/2/15~2019/3/3

参加者プロフィール



波田 悠暉（団長）
理工学部電気電子工学科3年

英語運用能力の向上が本研修参加の最大の目的である。さらに、現地学生や地域住民との交流を通して、アメリカの文化、習慣、価値観を体験したいという理由から本研修に参加した。



西山 智貴（副団長）
理工学部電気電子工学科4年

実力がついてから、では遅いと考え、大学院進学を前に海外という行ったことのない土地で様々な新鮮な経験をしたいと思い本プログラムに参加した。



矢埜 紅音
農学部生命機能科学科3年

大学院進学後の研究留学のために海外経験を積み、英語や海外文化にもっと触れたいという理由から参加を決めた。また、アメリカは旅行で訪れたことしかなかったので留学という別の視点からアメリカを感じたいと思った。



橋本 恭平
教育学部学校教育課程2年

実用的な英語能力を育成することを最大の目標とした。さらに教育学部に所属していることから、海外の教育システムを実感したいと思い本研修に参加した。



高井 佑豪
理工学部都市工学科1年

英語でのスピーキングおよびリスニング能力の向上、また歴史と文化が異なった土地での環境や習慣の違いを実際に体験して発見したいという目的を持って本研修に参加した。



坂本 綾香
農学部生物環境科学科1年

ネイティブの英語を実際に聞いて、触れることで自らの英語力に対するモチベーションを上げるとともに、異文化理解を深め、見識を広げたいという目的のもと本研修に参加した。



小柳 杏梨
医学部医学科2年

英語を用いたコミュニケーション能力の向上のみならず、様々な学生との触れ合いを通じて、多国籍国家ならではの異文化交流や文化融合を体験したいと考え、本研修に参加した。

プログラム概要

【期間】2019年2月15日～3月3日（17日間）

【留学先】パシフィック大学

2043 College Way, Forest Grove, Oregon

【内容】大学での授業や日常生活を経験する中で（学術）英語運用能力を高める。また、現地学生や地域の人々との交流を通してアメリカの文化、習慣、価値観を理解するプログラム。

パシフィック大学について

パシフィック大学は、オレゴン州フォレストグローブに位置し、学生数 3855 名、1851 年創立の歴史ある私立大学である。

パシフィック大学の大きな特徴はリベラルアーツカレッジであるということだ。平均クラスサイズが 19 人と少人数体制による教育が行われ、教師と学生のつながり、学生同士のつながりが非常に強いことがその特徴である。

開講されている学問分野として、人文、芸術、理学、音楽、教育、法学、歯学など様々な分野があり、特に Optometry の分野ではアメリカでトップレベルの教育を受けることができる。

授業

月・水・金は午前中が Listening & Speaking で 9:30～11:20、午後は Grammar で 13:00～14:50、火・木は Reading & Writing で 10:00～12:50 行われた。

クラス編成は 2 つに分かれており、Advance クラスではより高いレベルの授業を行い、High Intermediate クラスでは基礎をしっかり定着させるような授業を行った。Listening & Speaking では、積極的に英語を話すために、ペアワークなどを主に行い、スピーチやプレゼンテーションなども行った。Grammar では、基本的な文法について問題を解いたり、簡単なゲームをしたりしながら着実に身につけられるような授業を行った。Reading & Writing では、中文や長文を読んで理解を深めた上で問題を解いたり、簡単なエッセイを書いたりした。先生方の解説はとてもわかりやすく、スムーズな理解ができたので、英語運用能力の向上に確実に繋がったと思う。

2 週間という短い期間の中でも、他のクラスメイトと同じように毎日課題が出された。少人数制のクラスのため、発言もしやすく先生との距離も近いので楽しく授業に参加できた。

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
Free	Listening & Speaking	Reading & Writing	Listening & Speaking	Reading & Writing	Listening & Speaking	Free

	Grammar		Grammar		Grammar	

バディとの交流

このプログラムでは佐賀大生 1 人に対して現地の学生が 1 人か 2 人バディとしてついてくれた。バディは日本に感心がある方ばかりで、2 週間という短い期間ではあったが常に優しく私たちの現地での学生生活をサポートしてくれた。

他にもその地に長く滞在しているからこそわかる事や、大学付近のオススメのお店、少し離れた所に行く際の交通手段とその利用方法など多くのことについて教えてくれ、特に授業がない自由時間の過ごし方を決める際に助かった。

また、バディと会話する際、自分の英語が流暢でなかったとしても、バディは理解しようと努めてくれたので、バディの存在は、現地で英語を使う機会を増やしてくれ、私たち英語でのリスニングスキルとスピーキングスキルの向上にもつながったと思う。

ジャパンプラブのイベント

キャンパスでは多数の国際交流イベントがあり、そのうちの 1 つにジャパンプラブというものがある。日本人の留学生や、日本に関心があり日本への留学を考えている学生が週に数回、ミーティングを行っている。具体的には火・金のランチタイムに集まる「ジャパニーズテーブル」や木曜日の 17 時から 21 時まで「ジャパナイト」というイベントを行っている。

私たちはそのうちのジャパナイトに参加した。その週は日本の有名な食文化の 1 つである「お好み焼き」を作ったり食べたりしながら、国際交流を楽しんだ。交流では、お互いに英語や日本語を使いながらコミュニケーションをとったり、また日本語を教えてあげているような場面も見られ、とても有意義な時間を過ごすことができたと感じている。

国際交流が主なイベントではあるが、様々な大学から集まっている日本人の中でも積極的にコミュニケーションをとり、留学に関する情報や私たちが佐賀大学生という事もあり佐賀弁などの方言に関する話題で盛り上がった。

School 訪問

研修中にキャンパス近くの小学校、Forest Grove

Community School を訪れる機会があった。子供たちの日頃の授業成果や創作作品を展示する催し物が行われており、パペットショーを見たり、子供たちがそれぞれ定めたトピックについて研究したものを見たり、日本の小学校との違いを感じる興味深い体験ができた。Forest Grove Community School はアメリカの小学校としても特殊な部類で、クラスは2学年合同ながらも少人数であるが故に、先生と保護者は親密な関係にあり、科学や芸術の分野を幼い頃から探究できる環境が整えられている。加えて、高頻度で自然へ出かける field trip が行われており、環境保護の意識を自然と育むことができるようだった。教室で大人数が学び、教師と生徒、保護者の距離が遠い日本の小学校とは全く異なる小学校の見学は、日本の教育の在り方を考える良い機会になったように思う。

さらにこの見学は、ご自身の娘さんが Forest Grove Community School に通ってらっしゃる、パシフィック大学の先生に案内していただいたので、先生のお知り合いの方とも会話ができて、加えて説明は全て英語であったため、Speaking や Listening のスキル向上にも役立つ体験であった。ともすれば訪れる機会などなかったであろう小学校の訪問により、勉学に対する姿勢、心の持ちように非常に大きな刺激を受けた。

アメリカでの生活

1. 交通手段

アメリカでの交通手段は主にバスと電車を利用した。大学周辺は1つの路線しか通っていないので乗り間違えの心配はない。また Uber という民間タクシーのような手段もあるが現地の学生を通じてでないと利用は難しい。

まずはバスと電車について説明する。アメリカのバスは乗る際に運賃を支払うが、日本のように両替はできないので運賃をぴったり用意しておかなければならない。1DAY パスを購入すると5ドルでバスと電車が乗り放題になる。また2.5ドルで2.5時間乗ることもできる。運賃は州や会社によって違うので事前に調べるか現地の学生に聞いておく方が良い。降りる際はボタンを押すのではなく紐を引っ張る。電車もバスも約15分おきにくるのでとても便利である。LA などに行

くと夜にバスや電車に乗るのは危険だが、オレゴンは比較的治安が良く夜でも利用できた。

続いて Uber について説明する。Uber とは個人タクシーをスマホのアプリで呼ぶことができるサービスである。アプリで行き先、車の種類、料金、乗車場所、ドライバーなどを指定して配車を依頼する。料金は事前にクレジットカード情報を登録するのでその場で現金を支払う必要はない。料金もタクシーに比べると安くぜひ利用したいところだが初心者にはハードルが高いので現地の学生と乗り合って利用するのが安心である。

2. 市場・物価

オレゴン州は消費税がなく、アウトレットなどでのショッピングにはもってこいの州である。だが、佐賀に比べるともとの物価が高いためスーパーなどでは安いとは感じなかった。もちろん店舗や地域によって値段は異なるが、自分たちの生活圏での物価について説明する。

ジュース(ペットボトル)	2ドル
ポテトチップス	2ドル
サラダ	3.5ドル
パン(8個入り)	5ドル
コーヒー	2.5ドル
酒類(瓶ビール)	5ドル
フルーツミックス	2.5ドル
チキン(8ピース)	7ドル
ノート(学内ショップ)	2ドル
ボールペン(学内ショップ)	1ドル

3. 食事

大学周辺は多くのレストランがあり様々な料理を楽しむ。もちろん大学内のカフェテリアで食べることもできる。ここでは学食とレストランについて紹介する。

私たちはミールプランがないので現地の学生と一緒に学食に行き、ゲストとして学食を食べることができる。基本的にバイキングのような形で好きなものを取るが、料理も注文できる。もちろんジュースがあり飲み放題である。

「アメリカ合衆国とグローバル社会」

電気電子工学科 3年 波田悠暉

大学周辺には、ステーキやハンバーガーが食べられるレストランはもちろん、中華料理、タイ料理、ハワイ料理、日本料理のお店がある。安くはないが、学生証を見せると割引してもらえるお店が多い。一番驚くのは会計のシステムだ。一人一人に伝票が配られ、それにクレジットカードまたは現金を用意し会計をすませるという流れである。日本では、会計は別々でという嫌な顔をされる場合があるのでこのシステムはとても良いと思った。しかし、カード決済を目の前でしてくれるお店は大丈夫だが、奥に持って行って会計をすることは、カード情報を読み取られている恐れがあるため少し危険である。

4. 寮

大学敷地内にはいくつかの寮があり、学生はほとんどがそこに住んでいる。アメリカでは学年ごとに住む寮が異なるので、1年おきに引っ越すことになる。私たちは数ある寮の中で最古の寮に滞在した。

基本的にトイレ、シャワールーム、冷蔵庫、ランドリーは共同で、キッチンはなかった。ランドリーは無料で乾燥機まであるので便利だった。洗剤は本来ならば自分たちで用意しなければならないが今回は2週間しか滞在しないので現地のオフィスの方に洗剤をいただいた。

部屋は2人部屋でタオル、ハンガーは準備してあった。全館暖房完備なので寒さは気にならなかった。寮でお酒を飲む場合は許可があるので注意が必要だ。

まとめ

2週間という短い期間であったが多くのイベントに参加して現地の学生と深く交流ができた。また、現地スタッフの皆さんも親切に対応してくださったので問題なく過ごすことができた。大学があるフォレストグローブという町は治安が良く留学生でも比較的安心して行動できた。この2週間で学んだことを生かして英語能力の向上に励んでいきたい。

アメリカ独自の文化を考える時どのようなものを考えるだろう。私はハンバーガーとステーキくらいしか思いつかない。日本料理、中華料理はあってもアメリカ料理は聞いたことがない。その国独自の文化というものがない文化を体験したのは本研修が初めてであった。

グローバル化が進行している現在、アメリカについて考えてみることは非常に重要だと思う。グローバル化により、人、モノ、情報などあらゆるものが国境を越えて移動する社会になると仮定すると、日本もその影響を逃れることはできないであろう。多くの民族、文化、価値観、思想が共存する社会となる。アメリカこそグローバル社会を一国で体現している国ではなかろうか。アメリカは現在私たちがグローバル社会を考察するうえで参考にできる非常に重要な資料である。私はこの報告書の中でアメリカ滞在中を感じたこと経験したことをアメリカがグローバル社会であると仮定して書いてみたい。

まず、アメリカと自由について考察してみたい。日本ではアメリカを「自由の国」だと思っている人が多いように思われる。実際にアメリカンドリームという言葉もあり、私もうっすらと「自由の国」というイメージがあった。しかし、滞在中でアメリカ合衆国は本当に「自由の国」なのだろうかという疑問が生まれた。私が経験したエピソードを紹介しよう。大学近辺の教会の近くを歩いていた時の話だ。宗教観について気になっていたので友人の一人にアメリカの宗教について質問してみたが、宗教や政治の話は公共の場ではあまりしないほうがいいと言うのだ。人によって意見がはっきりと分かれるため、こういう類の話は危ないというのがその理由だった。公的には自由に発言できるとなっているが、実情はそうでもないらしい。この経験からアメリカ合衆国と自由について考えた結果、アメリカは正確には「自由の国」ではないという結論に至った。アメリカは自由を求めて闘った歴史があるため、正しくは「自由の国」ではなく「自由を求めて闘った国」であると感じた。これがアメリカ滞在中で経験した一つの転向である。上記のようにアメリカでは本当

の意味での体現しておらず、グローバル社会で自由を体現するのは非常に困難であるように思われる。

続いて、アメリカとコミュニティについて考えたい。アメリカに滞在中で大学や地域などコミュニティはアメリカ人のアイデンティティの一つになっているのではないかと考えた。キャンパスでは大学ブランドの商品が多数置いてあり、学内で大学ブランドのものを身につけている人も多く見られた。また、地元の団体・組織によるイベントも学内で開かれており、さらに、パシフィック大学の学生証を持っていればレストランでディスカウントを受けることができた。私はバスケットが好きでよく NBA を見るため大学の生徒にどのチームを応援しているか聞いて回ったが、みんながみんな出身地に拠点を置くチームを応援しているようだった。このようにコミュニティはアメリカで一つのアイデンティティ、特別なものとなっていると思われる。ここでは、なぜコミュニティがアイデンティティとなっているのか考えてみたい。まず、歴史的に見ると、アメリカは領土獲得のための歴史であるといえよう。東海岸から西海岸へと領土を拡大していったことはご存知の通りであろう。そのため「土地」という概念はアメリカ人にとって何か特別な意味を持っているのではないかと考えられる。続いて、アメリカが多民族・多文化国家であるために民族・宗教間の違いによる争い、差別の歴史があるため、コミュニティの結束が重要であったこと起因するものだと考えられる。チャイナタウンやコリアタウンが存在するのは結束の強さを物語る最たる例ではなからうか。さらに、伝統の欠如を一つの要因であると考えられる。日本など独自の伝統を持つ国は伝統というものが一つのアイデンティティになると考えられるが、アメリカではその伝統が成立し欠如しているためコミュニティにアイデンティティを求めたのではないだろうか。グローバル社会では様々なものがアイデンティティの一端を担うものと考えられる。すでに日本独自の文化・伝統を持っている我々はそれを保存していかなければいけないだろう。

次に、アメリカでの集団での意思決定方法について考察してみようと思う。滞在中、意思決定方法として日本では集団行動をするケースが多いが、アメリカでは個人行動をするケースが多かった。自由意志である。食事の参加にしても、イベントの参加にしても、自分の意思をはっきり表示すること

でその意思が反映される。空気を読むという文化がないのである。なぜこのような文化が育まれてきたのであろうか。まず、多民族国家であるため、文化や思想が全然違う民族が住んでいるため強制することができないという理由があげられる。強制ができないならば、自由参加にする他ないというわけだ。また、国として伝統が欠如している点も大きく関わっていると考えられる。伝統が欠如しているということは習慣や規則が欠如しているということ。何をやるか決まりがないので自由意思ということになるわけだ。もちろんグローバル社会での意思決定方法も自由意志となるだろう。

最後に、グローバル化にあたり日本が持つ課題について二つあげたい。一つ目は、メンタリティだ。日本では曖昧な表現を用いるが、アメリカでは直接的な表現が好まれる。真っ向から否定されることもあり、曖昧な表現を用いている我々日本人はそれに耐えるメンタリティを身につける必要がある。二つ目は、自文化保存である。多文化共生社会では自らの文化と他文化の教会が曖昧になるため、時代の流れとともに自らの文化が削られ薄れていくと考えられる。ここで自らの文化をどう守っていくかが課題となると考えられる。



バディとポートランド観光

「アメリカと日本」

理工学部電気電子工学科 4年 西山智貴

私はパシフィック大学プログラムに参加して、二週間という短い時間の中で多くのことを感じ、経験しましたが、中でも特に考えさせられたのが、アメリカの Elementary school での教育についてです。日本の小学校と似たような教育もあ

る中で、これだけは日本ではやらないことであろうというものが少なくとも1つはありました。それは、ある一つのテーマを定め、その内容についてリサーチし、自分の考えをまとめ、PCでプレゼンを作成し発表することです。

これは、日本では初等教育の段階ではほとんど経験する機会がなく、日本人の苦手とする分野ではないかと思えます。現に、私自身も大学に入学するまでそのような機会はなく、大学生たちも自分の意見をプレゼンテーションでまとめ、発表するという能力に関しては乏しいように感じます。これらの能力は社会に進出するにあたり、自分という人間を他者に対して伝える大事な能力であると思えます。

実際に、就職活動などをする際に求められる能力として、専門的な知識のほかに、コミュニケーション能力やプレゼン能力が多くを占めるでしょう。それにも関わらず、そのような教育が乏しいというのは、考えるものがあります。日本人が自分の考えを率直に相手に伝えずに遠回しに伝えるというのも、これらの理由によるものが大きいと思えます。アメリカで様々な国の留学生や現地の人と触れ合いましたが、彼らは自分の考えを素直にぶつけてきます。確かに、場面によっては直接的な言い回しは避け、オブラートに包む言い方のほうがトラブルを起こしにくいでしょう。しかし、自身の考えを直接伝えなくてはならない時まで、その習性が出てしまうと問題であると思えます。如何に座学や研究する能力が優れている人物でも、コミュニケーション能力やプレゼン能力が乏しい人は、社会で求められる場面は少ないと思えます。やはり、小さい時からそのような機会が多く提供されるほうが大人になったときに困らずに済むと思えます。さらに、パシフィック大学でいくつかの授業を受講しましたが、そのどれもやはり、自分の考えをまとめて相手に伝える、ディスカッションやディベートというものが多く、日本では使ったことのないような頭や、専門性が高まっていく教育の中で考えることがなくなっていったことを、改めて考えさせられました。私にとってはこれが良い機会となり、自分に何が足りていないのかを認識することができました。また、英語力の向上に関する意識が高まり、自主的に学習しようとも思いました。英語でディスカッションやディベートをすることはまさに最高の機会であり、もっと長い期間で留学というものを経験したいと感じています。今現在の環境では、専門性を高

めることはできても他の知識や能力を向上させるには物足りないように感じます。こういった環境を自分の手で変える力も大事だと思います。今回の海外研修も一時は行くことは諦めなくてはならない状況でしたが、他者の気持ちを変えて自分の意見をはっきりと伝えることができたからこそ、今回のプログラムに参加で来ました。そこから考えると、今回のプログラムでは、英語力の向上よりも、一人の人間として生きていく能力が最も成長したと実感しています。

最後に、私がこのプログラムに参加し感じたことは、アメリカと日本の教育の違いを認識し、そこから発生する性格や能力の差があり、日本には伝える能力が不足しているということです。また、一人一人が人間らしく自分の意志をもって生きていくことが何よりも大事なことだと、様々な人種の人と触れ合う中で改めて感じました。



現地の人との触れ合い

「未知のアメリカ」

農学部生命機能科学科 3年 矢埜紅音

私はパシフィック大学プログラムに参加して、アメリカという大きな文化を体験してきた。アメリカに行くのが今回で5回目となる私はアメリカについて詳しいつもりでいた。しかし、そこには私の知らない新しいアメリカがまだまだたくさん広がっていた。日本とアメリカの比較を大学での授業、大学スポーツ、大学イベント、食事、教育、生活について行う。

まず大学での授業について述べる。私が参加したクラスは上級クラスで日本の他にも中国やメキシコ、チリなどからの留学生がいた。授業1コマは約2時間と長い上に、慣れない英語とみんなのレベルの高さに食事が喉を通らない日々が3日くらい続いた。TOEICでは点数がとることができても自分の実際の英語力はこんなものかと思い知らされた。アメリカ人、いや、日本人以外は自分の意見をはっきりと持っていてそれを堂々と主張できる。授業中でも先生の問いかけにすぐに答えていた。できるかできないかではなくやるかやらないか。本当にこれだと思った。日本人は聞き上手だと言われることがあるがそうではない。明確な意見を持っていないがために聞く側に徹することしかできないのだ。授業でもグループワークをすることが多かったので、文法的に言っていることがめっちゃくちゃであっても自分の意見を主張し積極的に話し合いに加わる姿勢が大切だと身にしみて感じた。また、一番きつかったのはディベートだった。グループに分かれて討論するのだが、あらかじめ意見を言う人、反論する人を決めておいて、意見を言う人は考えた文章をそのまま言えば良いが、反論する人は相手の主張を聞いてそれに対する反論をその場で考えなくてはならない。反論する側は相手の意見を理解してそれに対して自分の意見をぶつけるので、難しいしボキャブラリーの少なさを痛感した。

次に大学スポーツについて考える。私は自分がバスケ部ということもあり、パシフィック大学の女子バスケ部の練習に参加したいと思っていたが、ちょうど自分たちが訪問した時期からオフシーズンに入ってしまう見学することができなかった。しかし、男子バスケの試合と野球の試合を見ることができた。パシフィック大学は大学の規模が比較的小さく、スポーツも上位のリーグには所属していない。しかし、私立大学ということもあり設備は佐賀大学とは比べられないほど充実していた。体育館のフロアにはPACIFICの文字があり、綺麗なジムもある。人工芝の屋内フットサルコートや陸上競技場、野球のスタジアムといった設備は本当に驚いた。私が一番驚いたのは応援に来ている学生が多いことだった。日本では、全国大会くらいにならないと応援に来てくれないだろうし、そもそも試合があることすら知られていないはずだ。大学全体でスポーツを盛り上げる姿勢はアメリカらしくて見えて気持ちがよかった。

続いて大学のイベントについて考える。2週間という短い期間だったが、Lunar New Year Celebration、Symphony Performance、Open Mic Night、Looking For Tiger Lily、coffee & connect w/ CPS、Japan clubといった多くのイベントに参加した。留学生が主催するイベントであったり、生徒会が企画したイベントであったりと毎週何かしらのイベントが行われていた。掲示板もそういったイベントの宣伝のために学生たちが掲示したビラで埋め尽くされていた。掲示板は先生が学生に情報を提供するだけのイメージだったので、佐賀大学ももっとイベントなどをメールだけではなく掲示物として掲示できれば良いと思った。また、留学生によるイベントを増やしても良いと思った。今回参加したLunar New Year Celebrationは中国の正月をイメージしたイベントで中国からの留学生が主催している。文化体験はもちろん、たくさんの学生が参加していたので友達がすごく増えた。日本に興味を持っている人はそんなにいないと思っていたのに、日本に行ったことがある人や日本語が少し話せる人がたくさんいて嬉しかったし、その人たちと繋がれたことがまた嬉しかった。佐賀大学でもcultural nightだけでなく、国ごとのイベントを催しても面白そうだ。

続いて食事について考える。アメリカは5回目だが、驚いたのは、飲食店で会計の際に各々伝票が配られることだ。日本だと、レジで会計を別々にしようとすると思われることが多いのでとても便利だと思ったのだが、クレジットカードで払う場合、カードを店の奥に持って行って作業している店があり、もしかしたらカード情報を読み取られている可能性があるので注意が必要だと感じた。

続いて教育について考える。大学に併設している幼稚園と地元の小学校を訪問した。幼稚園では日本語の数字の教え方を教えた。子供達は外国人の私たちに人見知りする様子もなくとてもキラキラしていた。小学校では子供達の作品を見学させてもらった。特に興味深かったのは、小学生のうちからプレゼンや研究をしていることだ。日本でいう夏休みの自由研究といえばわかりやすいが、それをはるかに上回るレベルの作品しかなかった。自分の疑問に対する仮説を立て実験、調査し、結果、考察、今後の展望までが述べられていた。過去の自分にそのようなことができたのだろうか。大学生になってやっと本格的に理論的なプレゼンをしているのが日本の現

「海外研修を終えて」

教育学部学校教育課程 2年 橋本恭平

実だと思った。教育が専門分野ではないが、この件に関しては本当に感心したし、こういう基礎があるからこそ大人になって自分の意見を明確に主張できるのだと思った。

続いて生活について考える。大学がある Forest Grove という町はとても田舎で夜出歩いたり、バスを利用しても大丈夫なくらい治安は良かった。LA を経験している自分としては、もっとホームレスや物乞いの人が道端にいるイメージをもっていたので少し安心した。しかし、現地の日本人の留学生が席に財布を置いたまま注文しに行き、お金をすられたことがあったので油断は禁物だとつくづく感じた。日本が当たり前なのではなくこういう海外の現実が当たり前ということを理解するには時間がかかるかもしれないが、グローバル化が進む今、日本人が世界に合わせる必要があると私は思う。

最後に、上記のように日本とアメリカを様々な面から比較してきたが、私たちが誇る日本はアメリカに劣っているようにしか感じない。もちろん日本は住みやすく快適で、技術力も素晴らしい。しかしそれは表向きだけで人として負けていると私は思う。日本人は、自分の意見を主張でき、主体的にスポーツやイベントに取り組み、小さい時から理論的に考えられているか。それだけではない。アメリカでは信号機の無い横断歩道で人が待っていたら必ず止まってくれて、ドアを開けようとしたら前の人が開けてくれている。2週間のうちに何十回「Thank you」と言っただろう。アメリカは怖いというイメージを抱く人も少なくはないだろうがそれは本当に偏見で、アメリカの人は皆、日本人以上にあたたかかった。アメリカは好きだし、また行きたいと思わせる国だ。私は大学院に進学して研究留学をする予定なので是非またアメリカに行き行って新しいアメリカに触れたいと思う。そのためにも学んだことを生かして人として成長し、もちろん英語力もレベルアップしてアメリカに戻ってきたいと思う。

私はパシフィック大学プログラムに参加して、それまでの自分とは大きく変わるような考えを持つようになった。その背景にはどのような経験があったのか、そしてどのような考えを持つようになったのかをこれから述べていきたい。

私を含め7人の佐賀大学の学生は2月15日～3月3日にかけて、アメリカ合衆国のオレゴン州にあるパシフィック大学に約2週間短期留学という形で滞在した。現地に到着してバディや現地の学生に挨拶をした際、日本語をとっても流暢に話す学生が多いということに気づいた。後に日本人や日本とのハーフである人が多い地域で、ハワイ出身の人が多いということがコミュニケーションを通して分かった。私は過去にスリッパリーロック大学のプログラムでペンシルベニア州を訪れたことがあるが、同じ国であってもアメリカという非常に大きな国ともなれば民族の分布に違いが出るということに身を以て体感できた。

今回のプログラムでは大学内にある学生寮に滞在して、スーパーに行って食材や生活必需品を買ったりするなど、アメリカでの実際の生活を体験した。しかし、私は実家生であり生まれてこの方一人暮らしというものをしたことがなかった。2週間とはいえ、言語や文化も違うこのアメリカというところで食事や洗濯、身の回りのことをこなしながら勉強をするのだと思うと、到着間もなく時差ボケで疲れていたのもあると思うがとてつもない不安感が押し寄せ二日間ほど軽いホームシックの症状に陥ったことを強く覚えている。しかし、今となってはとてつもない経験をさせてもらったと感じており、日々の生活のありがたさや日本の素晴らしさ、そしてこの留学に援助してくれた親への感謝の気持ちを再認識することができたと思う。

このように初めは環境への適応に苦労していたが、それを改善させてくれたものとして新しくできた友の存在は欠かせない。現在パシフィック大学には私たちの他に、名古屋外国語大学、桜美林大学といったところから中長期での留学をしている学生がいる。その他、サウジアラビアや中国と行ったところからも留学生がきており、彼らとはフィールドトリップや授業などで様々な話をして親睦を深めた。さらに滞在期間



Local Elementary School 訪問にて Scot の説明を聞く様子

中に大雪により休講になった日には、バディや現地の学生とカードゲームして一緒にランチを食べ、雪合戦を子供のように楽しみ言語の壁を超えた交流をすることができた。2週間という短い期間だったにも関わらず週末には私たちをポートランドへと連れて行ってくれ、別れの際には、早朝から見送りに来てくれてプレゼントまでいただいた。日本人に負けない「おもてなし精神」を感じた。彼らのサポートがあったからこそ今回のプログラムを充実して終えることができたのだと強く感じており感謝の気持ちでいっぱいである。

述べてきたようにアメリカでの生活は周囲の協力を得ながら何とか過ごすことができた。ここからは留学のメインとも言える授業について振り返っていきたいと思う。私たちは2つのクラスに分かれ、アカデミックイングリッシュの授業を毎日受講した。授業内容としては英語のリーディング、リスニング、ライティングそしてスピーキングの4技能を満遍なく学習した。日本で英語を学ぶこととの違いとして、学習内容だけではなく授業を構成する全てのことが英語をツールとしていることである。さらに、これは大学の特色でもあるが少人数制のクラスである事も発言やディスカッションの活性化を促し、自然と英語を使う雰囲気が出来上がっていた。担当教員も非常に気さくな方々で、普段あまり深く考えていなかった冠詞についての基礎的な部分に対し例を出しながら説明してくれた。また、基礎だけにとどまらず論文の書き方の指導やプレゼンテーションの課題などでより実践的な学習を体験できた。

繰り返しになるが約2週間という期間の中でこれまでに経験したことがないようなことをいくつも体験することができた。私がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは、もっと英語を話せるように、聞けるようになりたくその1つのモチベーションの手段として活用したいと思ったからであった。このプログラムを通して英語の能力が格段に上がったかと言われるとはっきりとは断言できない。しかし、これまでの英語に対する意識から大きく変わったのは間違いない。話が変わるが私は教育学部で特に大きな気持ちの変化がない限りは将来英語の先生を目指そうと考えている。英語はその道具として勉強しなければいけないと思っていた。実際、TOEICや英語検定など教員採用試験の加点対象となるものに対して学習をしていた。そのように英語を勉強しなければい

けないと思わせてくれたのは半年前に参加したスリッパリーロック大学のプログラムでそれ以前は特に英語に対して高いモチベーションを持っていなかった。そして今回のプログラムを終えて、もっとコミュニケーションとしての英語の力をつけたいと思うようになった。とは言っても私は文法が苦手な細かいことから避けており、英作文を書くのも決して得意とは言えない。このように現状穴だらけの英語状況から、根本的な部分をもう一度見直し、これからの自分の将来と英語の関係性を再考したいと思うようになった。

この春から大学3年生になり、早くも大学生活も折り返しを迎えたこの時期にこのプログラムに参加したことで、自分の将来や英語学習について真面目に考える機会を持つことができた。残りの春休み中で悩みぬいて新しい学期に自覚を持って迎えらるるよう過ぎしていきたいと思う。



フィールドトリップでの一場面

「異文化の体験」

理工学部都市工学科 1年 高井佑豪

はじめに、私がパシフィック大学プログラムに、参加しようとした決めた理由は主に2つあった。1つ目は自分の英語でのコミュニケーションスキルを向上させたいというものだった。これは将来グローバル化が進む社会で役立つと予想される力を身に付けたいという思いと、以前アメリカに行ったとき自分の意志を思うように伝えられなかった悔しさから生じたものでもある。2つ目は文化や歴史の違いによる、環境や人々の生活や行動の違いを実際にその環境の中で生活する事で感じ発見したいというものだった。私が大学で学んでい

ることが建築や環境の整備ということもあり、それらの点における違いも見つきたいと考えていた。

まず、今回アメリカに行って実際に生活してみて、現地で暮らす人々との習慣や行動の違いをいくつか感じた。

実際に生活してみて一番わかりやすく違うと感じたところは、お店などに入った時にかわす挨拶だったように思う。日本では接客する際、お客様は神様という言葉があるように、基本はお客さんに対する言葉使いも変わり交わす言葉も最低限に必要なことだけといった印象がある。一方でアメリカではHelloなどの簡単な挨拶で始まり、次には必ずと言っていいほど調子を聞かれた。これに応えたり、時には相手の調子も聞くことで、そこから日常的な会話に繋がったりと親しみやすさを感じた。これはそもそも日本にある丁寧語といったような言語が存在していないことから生じる違いかもしれないが個人的にはアメリカの方が親しみやすく好きだった。この言語の違いによるものかはわからないが親しみやすさで言うと断然アメリカの人々の方が日本の人々よりも上で、知らない人でもフレンドリーに話しかけてくるといったことが少なからずあった。

他にも習慣的な行動の違いとして感じたことは、ドアがあるところを通る際、先にドアを開け後ろに続く人たちを通してあげるといった習慣があるように思った。実際アメリカにいる間、多くの人が自分のためドアを開けておいてくれ、逆に自分がドアを開けておいてあげると必ずThank youと言ってくれた。これは小さな事だがこのような事の積み重ねがフレンドリーな人が多いアメリカの独特な文化を作っているようにも思えた。他にもExcuse meと言われ道をあけてあげた時も、毎回お礼を言われたように思う。日本人はよく親切だと言われるのを聞くが、日常生活の中でお礼を言う回数はアメリカの人々の方が多いように思った。

次に、パシフィック大学プログラムに参加中、実際に授業を受講したり、日本では小学生くらいの子供たちが通うコミュニティースクールを訪問させてもらったりした中で、教育に関して感じた日本との違いがいくつかあった。

まず、実際にパシフィック大学での授業を受ける中で、先生が生徒たちに問う場面が多くあった。日本ではこの場合、生徒が挙手し、先生が指名し発言するといったことが当たり前のように思える。しかし、そこでは生徒たちは思いついた

ことを自由に発言することができた。しかもこれは先生が生徒に問う時に限らず、いつでも生徒たちは疑問に感じたことなどを自由に発言していたように思える。私も最初はこの授業システムに違和感を感じていたが、慣れてくると日本で受けていた授業よりも先生との距離を近く感じられたように思う。

また、現地のコミュニティースクールを訪問した私たちは生徒たちの作品を見せてもらったが、そこにも日本との違いを感じられた。私たちが訪問したとき日本の学校でいう自由研究のような作品が展示されていたが、そのどれもが個性的で、中にはアンケートなどの調査を使った研究などがパソコンを使ってまとめられているものもあり、とても日本の小学生では考えられないようなレベルが高い作品ばかりだったように思う。さらに子供達に作品の説明をしてもらおうと非常にわかりやすく細かく説明してくれた。その子供たちの様子からは主体性を感じることができ、自分の意志ははっきりと主張するといったアメリカの文化をも感じることができた。

今回、パシフィック大学のプログラムに参加して、およそ2週間と短い期間であったその中でも生活する中でいくつも文化や人々の習慣の違いを感じ発見することができ、それと同時に日本とアメリカの共通点も、普段、当たり前のように思っていることがほとんどではあるが見つめることができた。約2週間という短期間でもこれだけの違いや共通点を見つめることができたのだから、実際にはまだまだ多くの違いが存在することは予想できるし、機会さえあれば今回よりも長期間滞在してアメリカの文化をもっと感じたいと思った。

また、今回は語学力の向上という目的も持ってパシフィック大学のプログラムに参加したが、参加中、この目的を達成するためには自分から積極的に話しかけに行くことが重要であるということを日に日に感じていった。はじめ私は自分の語学力に自信がなくこれが出来なかったが、現地の人と話す事を重ねていくたびに言葉でうまく表現できなくても伝えようとさえすれば相手は聞いて理解しようとしてくれることがわかり、なんとか自分が伝えたい事を知っている表現を使って伝えようとする気持ちを持つことができた。これにより英語を使う機会が増え、英語を聞き理解し話す力は伸びたように思う。

パシフィック大学プログラムに参加するにあたって持った

目標、それらは日本に帰ってから意識することで実現に近づけることができると思うので、これから異文化との交流などの機会があるときは積極的に参加していきたいと思う。



訪問したコミュニティー学校の校庭

“Wonderful Experiences”

農学部生物環境科学科 1年 坂本綾香

私はパシフィック大学プログラムに参加して、多くの現地の人々と触れ合うことで、英語運用能力の向上だけでなく、日本とアメリカそれぞれの良さを分かち合うことができました。そこで、アメリカでの体験で私が感じたことをいくつか述べたいと思います。

アメリカに着いてすぐは、バディたちとの顔合わせがあり、お昼を一緒に食べたり、キャンパスツアーをしたりして早々に親睦を深めました。授業は月、水、金と火、木で同じ科目が開講されます。日本の大学は月曜から金曜までそれぞれ違う科目が開講されるのでその点でまず日本と異なることがわかります。毎日のように課題が出され、それをこなしていくことでスムーズな授業展開が行われます。クラスは少人数制なので、先生との距離が近く、発言や質問をしやすかったです。すごくいい環境だなと思い、授業を受けやすかったのが印象的です。

そして、授業は基本的にはお昼で終わるので、そのあとは自由です。そのため、私たちは school 訪問やボランティアを行ったり、大学のイベントなどに積極的に参加したりしました。school 訪問では、まず小学校低学年ほどの年齢の子たち

と触れ合いました。そこでは数字の 1~10 を日本語で教えるという活動をしました。ジェスチャーを使用し、発音が似たような英単語を出すことでわかりやすく説明しました。また、子供達の名前を聞いてそれをひらがなで書いてあげて渡すと、とてもキラキラした目で喜んでくれたので、私も嬉しくなりました。好きな言葉を日本語にして書いてあげたり、私たちの日本での生活についての質問に答えたりして有意義な国際交流をはかりました。滅多に体験できないことができました。次に、別の学校へ移動し、そこでは工作や研究の展示会が行われていました。規模は小さい学校ですが、それゆえに、先生との距離も近く、子供達がやりたいこと、興味のあることを自由に研究できているのだと感じました。日本ではみんなで同じことをやるのがほとんどですが、アメリカではとにかく好きなことを伸ばす、というスタンスで教育を行っているのだと気付きました。

その他にも、雪で授業がなくなったため急遽行くことになった field trip では、伝統ある Forest Grove のホテルに連れて行ってもらいそこでクイズを解いたり先生とティータイムを楽しんだりしました。アメリカに来てから驚いたことや、気になったことなどをみんなで共有して、アメリカについての理解をさらに深めることができました。特に、研修中によく雨が降っており、大学内で傘をさす人が全くいない件について、オレゴン州は天気雨が多いため雨が降るたびに傘を開いたり閉じたりするのは大変なので、傘をささないというのを聞きました。そして、傘をさしている人を見かけたらオレゴン州以外の出身だとみんな認識すると聞いて、とても面白いなと思いました。アメリカでも州によって違いがあることについて改めて興味を持ちました。

また、土日は大学を離れて、ポートランドやアウトレットに行き、限られた時間の中で買い物を楽しみました。オレゴン州は消費税がないのでつい買いすぎてしまいそうになります。海外での買い物は私にとっては未知の世界で、日本と違う点がいくつか見られました。まず、レストランで水が当たり前のように出てくることはありません。基本的には聞かれてから出されます。そして店員を呼ぶこともしません。量に対しての値段も良かったように感じました。また、普通の shop の中には、レジにいる店員さんが横に飲み物を置いて飲んでいるというお店もあります。日本ではまず考えられませ

んが、アメリカでは誰にも何も言われないので日常的なのだとわかります。

パシフィック大学には他にも日本人の留学生がたくさん在籍しており、みんなでご飯を食べたり、お互いの経験について語り合ったりしました。バディやその他の現地の人々は、私の拙い英語で、単語が出てこなくても、待っていて、時には助けてくれたり、しっかり理解してくれようとしてくれて、安心して積極的に英語を話すことができたと思います。日本について興味を持ってきている現地学生も多くいたので私のホームタウンのことや佐賀のことなどについて共有し有意義な時間を過ごしました。

私にとって、これが初めての海外研修で、出発前はもちろん期待もありましたが、他のメンバーとは顔見知りではなかったのでもうまくやっていけるかという不安もあり、直前まで複雑な気持ちでした。しかしそれも、一緒に生活するにつれて、最終的にはお互いを理解し、尊重することができました。そのため、不安はなくなり、自分の思うままにこの研修を楽しめることができたと思います。今回のこの経験を生かしてさらに自らの英語力を鍛えていきたいです。



the Grand Lodge(field trip)でのティータイム

「海外研修から日本を考える」

医学部医学科 2年 小柳杏梨

私はパシフィック大学プログラムに参加して、英語力の向上を図る授業だけでなく、ボランティア活動や小学校訪問など様々な活動を通して、多くの経験を積むことができた。その中でも、印象的だった出来事について述べたいと思う。

まず周知の事実であるが、アメリカは多国籍国家である。今回お邪魔したパシフィック大学でも、ハワイ出身の人や、

親がアジア人である人と多く知り合った。学生皆の出身が多様であるからこそ、大学では異文化理解が積極的に行われている。わずか2週間の滞在の間でも、ベトナム、中国、日本の文化を紹介するイベントが開催されていたほどだ。そのイベントを開催したのは、それぞれの国の文化を学ぶ部に所属する学生で、親や自身の出身から所属を決めた人もいれば、出身に関係なく異文化理解をしたいということで所属を決めた人もいたようだった。イベントでは、料理、民族衣装、伝統的な踊りなど様々なことを学ぶことができ、自我の構成に重要であろう文化の一端を垣間見ることができた。イベント開催という形で文化を学ぶ部活動もあれば、ディスカッションを通して文化を学ぶ部活動もあり、友達になった学生さんの計らいで見学をさせていただいたが、学生の異文化理解に対する意欲の高さに驚くばかりだった。日本では両親共に日本人という生徒が圧倒的に多く、接する相手が日本以外の文化に根付く人かもしれない、ということを考慮しない者がほとんどである。部活動に関しても、日本文化を学ぶ部は多数あっても、異文化を研究する部は少数だ。グローバル化が叫ばれている昨今、対話を行うための語学力ももちろん重要であるが、そもそもの前提として、相手を構成する文化に対する理解を深めることが何よりも大切だと痛感した。

また今回、パシフィック大学プログラムへの参加を決意した最大の理由である、英語力の向上に最も効果的だったのが、英語で会話することだ。授業の種類としては、Grammar、Reading&Writing、Speaking&Listeningに分けられていたが、すべての授業において、コミュニケーションをとるには英語での会話が必要であり、否が応でも英語を聞き取り、会話しなくてはならない。この英語しか使えないという環境が、英語を学ぶのに最も重要だと感じた。日本の英語教育では、英語で会話をする機会に恵まれておらず、Grammarを学ぶには適している、何のために英語を学ぶのかという根本の理由にあたるSpeakingの能力は得られない。今回パシフィック大学で知り合った学生に、「日本人は英文を書いたり、聞き取ったりはできるのに、話せない人が多い」と言われてしまうのも致し方ない状況である。このように、日本にいたままでは英会話能力を身につけるのが困難であるから、多くの人が留学という道を選ぶのだと痛感した。たった2週間の短期であっても、学内で他の学生と会話したり、レ

ストランで料理を注文したり、お店のレジで店員さんと雑談したり、日常のさまざまを英語で過ごすことは何にも代えがたい貴重な経験になった。

もちろんパシフィック大学の授業自体も刺激的で、楽しく英語を学ぶことができた。特に雪で休講になった授業の振替として、キャンパス近くのホテル Grand Lodge に行った field trip が面白かった。先生に渡されたクイズの答えを探してホテル内を探検するというもので、グループ対抗戦のゲーム感覚で、ホテルの従業員のの人に質問するなど英語で会話を行えた。そのアクティビティの後には、先生と生徒の皆でテーブルを囲み、留学生それぞれがアメリカに来て最も印象的だったことや好きな料理、疑問に思っていることなどを話し、Speaking の練習をした。パシフィック大学は私立の大学であり、私たちが参加したのは少人数の留学生クラスであるということもあるが、先生方は生徒皆の名前を憶えてくださっていて、お会いする度に気軽に声をかけてくださる、生徒と先生の距離が近い環境にあった。加えて、授業の度に宿題が課され、ネイティブスピーカーにインタビューをしたり、スピーチを作成したり、毎回の授業を、緊張感をもって迎えられる環境が、私には非常に好ましかった。大学生として2年間を過ごした中で、座学において宿題を課された記憶はほとんどないが、日本の大半の大学生も同様であろう。このことが講義をただただ機械的に消化したり、ともすれば安易に講義を欠席したりすることにつながっているのではないかと感じた。少人数のクラスであれば、宿題をきちんとこなしているのか、先生がチェックすることも可能なのであろうが、一般的に大学は1クラスの人数がとても大きく、毎回の講義で全員の課題を評価するのは、先生の労力の観点から考えても、非現実的なのは確かである。つまり、課題を課されずとも、自ら講義の予習や復習をこなしたり、疑問に思うことを追究したりするような姿勢を学生が身につけることが最適なのだ。今回の研修中に、キャンパス近くの小学校、Forest Grove Community School を訪れる機会があり、子供たちが普段どのように学んでいるのかを知ることができたが、彼らは幼い頃から、自分が興味を持ったことを自主的に研究できる環境にいるため、自ら積極的に勉強する姿勢が身につけているようだった。このように、周りに言われて嫌々勉強するのではなく、自分の意志で勉強しようと思える環境づくりが幼

少期から整えられていることで、大学生、大人になっても勉強や探究に対する意欲を高く持つことができ、延いては学力然り、テクノロジー然り、様々な分野でアメリカが世界の先端をいくことにつながっているように思う。折角、興味がある分野を現在学んでいるのだから、今まで以上に力を込めて向き合いたいと思った。

今回の短期海外研修を通して、英語力の向上のさせ方だけでなく、勉強に対する姿勢についても深く考えさせられた。日本との違いを感じながら、アメリカ独自の文化をたくさん体験できた貴重な経験を胸に、今後、遭遇する出来事に対して多角的な視点で考えるように努めたい。



field trip にて訪れた Grand Lodge